

ナナカマド

牧 幸 男

秋はさまざまな木々が紅葉するが、その時期は植物によって様々である。秋を代表するナナカマドの紅葉は、最も早い部類に属する。この植物の紅葉の美しさが理解されるようになったのは、この植物を街路樹に採用されてからであろう。最初に街路樹に採用したのは、昭和の初め室蘭市と言われている。50年ほど前からは多くの都市でも街路樹に採用するようになった。街路樹の要件は、・成長が遅いこと、・樹姿がよいこと、・落葉が比較的少ないこと、・四季折々に姿を変えて私たちを楽しませてくれる四条件が求められている。



街路樹のナナカマド

ナナカマドは、春の新緑、初夏の真っ白な花咲く姿、夏の季節は緑陰を、秋は美しい紅葉後、枝先に残る赤い実も美しい風景となる。特に、赤い実に雪の積もる姿は、自然が創造する見事なコントラストとなる。更に、この実を求めて小鳥達が群がる様子は、街中でも見ることができ風物詩となる。最近は、公園や庭木に使われ身近な植物となっている。



ナナカマドの花



ナナカマドの果実



厳冬のナナカマド

街路樹に採用されるまでは、ナナカマドは主に山地に自生していたので、紅葉の見事さが人々の目に触れることは少なく、山仕事をする人達や登山仲間が楽しむ程度であった。八月も下旬、ナナカマドの葉が色づき始めると、山小屋を閉じるシグナルであった。山登りに熱を上げていた若き頃、山路を歩きながらナナカマドの葉が先端から紅葉が始まる姿に接すると、今年の夏山シーズンもいよいよ終わるのかと寂しさを覚えたことが今もよみがえってくる。今日のように山登りがポピュラー化し、山小屋が閉まるのは11月になるとナナカマドの紅葉は秋の始まりを報せる程度となってしまった。街路樹のナナカマドは、私に若き日の山行きを思い出させてくれる。葉は互生、奇数羽状複葉、小葉は5または7対、長楕円形、鋭尖頭、基部円形あるいはくさび状の鈍形、柄が無い。ふちには単きょ歯または重きょ歯があり、歯牙の先端はのぎ状になる。長さ約3~6cm、幅1~1.7cm、上面は緑色、下面は淡色で無毛。晩秋には紅葉して美しい。花は7月に開き、白色小形で枝の端に多数集まって複散房花序を作る。がくは倒円錐形で5裂し、裂片は広卵状三角形で鈍頭、花弁は5、平たい円形、内面に毛がある。花柱は3~4本、基部に軟毛が密生する。梨果は球形、径6mmぐらいで集合して垂れ下がり赤く熟す。

ナナカマドは、我が国全土の山地に自生するバラ科の落葉高木で、高さが7~10m、径が30cm程に成長する。枝は暗褐色で、全体に無毛である。樹皮は、おびた暗褐色で、表面はざらざらしており、皮目が散在し、一種の臭気を放つ。枝は濃紫紅色をしている。6月頃小さな白色の花を枝の先端に房のように付け、落葉後、赤い果実が垂れ下がる姿を見ることができる。世界にはナナカマド属が約80種生育している。我が国では、新訂牧野新日本植物図鑑にナナカマドの他に、葉の裏に鉄サビ色の毛があるサビハナナナカマド、北海道以北に生育するオオナナカマド、高山または亜高山帯に生育し葉の裏面が白いウラジロナナカマド、同じく高山及び亜高山帯に生育する小型のタカネナナカマド、関東以西に多い葉が小型のナンキンナナカマドの6種が記載されている。

ナナカマドは、深山に多く生育しているので、一般の人はあまり縁のない植物だった。そのため、伝承は多くない。

伝承の一部を紹介すると、

- ①北欧神話：雷神トール*が激しい洪水で流されそうになった時、この木につかまって命が救われた。このため、魔除けや農耕神、旅の安全（水難除け）の木として大切にされている。

注*：トールは北欧神話（ゲルマン人が多く信仰している）に登場する神で、雷や嵐を司るアース神族の最戦神である。彼は神々の王オーディンの息子で、赤い髪が生えており、豪快な性格がある。必殺の武器では雷のハンマー「ミョルニル」で、巨人たちから神々と人類を守る最強の守護者として広く信仰されてきた。

- ②アイヌの神話：天然痘などが流行病した時、ナナカマドの木を燃やした煙で病魔を払ったので「魔除けの木」として崇めてきた。^{あが}

詩歌に使われ始めたのは、一般の人々の目に触れるようになった、昭和以降が多い。

ななかまど あふるるばかり 赤き実よ 木々葉落せし 山中にして 佐藤佐太郎

ナナカマド 赤く色づく 登山道 見上ぐる空は 青く澄みたり ^{ゆたか} 水野 豊

ななかまど 夕日より道 走りだす 長田耕一郎

湿原に ^た 神の焚く火が ななかまど 堀口星眠

植物名は、牧野富太郎博士の説は、材は燃えにくく、かまどに七度入れても焼け残るのでこの名が付いたと述べている。確かに燃えにくく乾かすにも手間が掛かる。一方、ナナカマドを原木として炭を作る時、材質が硬いため七日間ほどかかるから名付けたという説もある。漢名は「^{ななかまど}花楸樹」と「^{かまど}七竈」が使われている。

学名は *Sorbus commixta* で、属名は古いラテン名でバラ科を示し、種小名は混合したの意で小さな花がたくさん咲く姿から付けられた。

和名の説明の追加

- ・「この材で作った食器は7世代も使えるほど強い」という説。
- ・「7度竈に入れても炭にならない」という説。
- ・「7つの釜いっぱいにできた粥のうち食べきれない分を穴に埋めると、一本の木が生えて赤い実をつけたので、人々がその霊木を『七かまど』と詠んだ」という説。
- ・「この木を植えると四隣七竈に雷火の災いがないので、七竈と名づけられた」という説

更に、中村浩（1910～1980）氏の著作『植物名の由来』（1980）では「ナナカマドの木炭は火力が強く、これを作るには7日間炭焼きのかまどに入れておく必要があったため「七日かまど」と呼ばれており、それが詰まってナナカマドになったという説が示されている。

薬用は、樹皮の煎汁を、下痢や膀胱の病気に利用することがある。^{ぼうこう}

食用は、北ヨーロッパではかなり広く、古くからジャムや果実酒にしてきた。我が国では、1993年に北海道大学で果実をジャムやマーマレードなどの商品化の研究が行われたが実用化していない。日本産は苦味が強いらしい。しかし、薬用酒として楽しむ方法があり、焼酎漬けにすると美しい赤い色のお酒が出来上がる。

応用は、材質は比較的硬く、辺材は淡黄色、心材は暗褐色で、木目は緻密である。この性質から、ろくろ細工、彫刻用材、家具などに利用されている。他、紅葉、果実を生花材に利用する。

花言葉は、「慎重」「賢明」「私はあなたを見守る」である。

